【研究ノート】

美濃焼窯業地における現代陶の現況

国際ファッション専門職大学
廣田　緑

キーワード
伝統的工芸品、美濃焼、現代陶、陶芸家

1　はじめに

日常の食器、調理器具、花瓶、浴槽や手洗いの鉢、観賞用の美術品に至るまで、日本のやきものは「土と炎の芸術」の造形物として、日本各地で長年にわたって人の暮らしを彩ってきた。

やきものはその原料によって陶器、磁器、炻器、土器の 4 種類に分けられる。また成形方法や釉薬の技法、焼成する際の窯の種類によっても多種多様な名称がつけられている。これら技術や素材面からの分類がある一方で、制作されたモノ自体も、その形態や用途、特徴によって、鑑賞陶器、器物、立体造形、クラフト、オブジェ焼きなど、さまざまにジャンル分けされ、評価される。しかし、これらジャンルには明確な定義があるわけではなく、日常で使用できる機能のある器をつくる陶工が、一方では鑑賞陶器といわれる、いわゆる芸術品としての陶磁器を制作していることもある。

日本における陶芸を人類学的に研究したものには、大分県日田市小鹿田の窯業地を対象地として陶工の集落構成に対する生産・需要・供給関係の影響についての社会人類学的調査［モーラン 1980］や美術・陶芸の価値観についての参与観察［モーラン 1989］があるが、美学や美術史、地理学に比べてさほど多くはない。海外に目を向ければ、アメリカ大陸最古の土器文化［ルナゴメス 2021］、カンカナイの社会における土器製作者［大西 1998］、現代カンボジアにおける土器づくり［坂下 2016］、現代エチオピアにおける土器職人［金子 2011］など、どちらかといえば原始的にやきものを生産している地域における、技術伝習、身体技法などに焦点をあてた研究、あるいは考古学的視点からの研究は散見される。しかし日本の「やきもの」についての研究は、鑑賞陶器といわれる、人間国宝がつくった器の美的価値、あるいは地理学的に見た窯業地の発展［濱田 2006］などが調査対象とされることが多い。

そのような中で、窯元や作家を対象として、伝統工芸がどのように現代化されていくのかを膨大なアンケートでまとめた羽田新［2003］や、現代日本における陶芸作家の経歴を類型化することを試みた谷口重徳［2003］は、現代の日本の窯業地における生産者の実態に深く切り込んで研究しており興味深い。しかし、谷口の調査で明らかにされるのは、現代陶芸家の出自と弟子入りや就職といったその後の進路、そして活動場所についてのデータであり、そこでつくられる作品や発表の方法には触れられていない。そこで筆者は、やきもののつくり手がどのような環境でどのような想いをもって土と向き合うのか、多様なジャンルが交錯する中で、つくり手はどのように同業者間や販売のネットワークを形成するのかを、窯業地でのフィールドワークから考察したいと考えた。

E-mail：hirota.midori@piif.ac.jp

このような経緯から本稿では、窯業地における伝統継承と現代陶の比較研究の第一歩として、美濃焼の生産地で現代陶に関わるつくり手について、2021 年 3 月から開始した現地調査によって得たデータをもとに、その現況を提示することを目的とする。

2　窯の密集地、東海地方

「伝統的工芸品」とは、伝統的工芸品産業の振興に関する法律（昭和 49 年法律第 57 号）に基づいて経済産業大臣によって指定された、以下 5 項目に該当した工芸品のことである。

1. 主として日常生活の用に供されるもの
2. その製造過程の主要部分が手工業的
3. 伝統的な技術又は技法により製造されるもの
4. 伝統的に使用されてきた原材料が主たる原材料として用いられ、製造されるもの
5. 一定の地域において少なくない数の者がその製造を行い、又はその製造に従事しているもの

3、4 項目にある「伝統的」とは、伝統的工芸品産業振興協会が発行する『伝統的工芸品ハンドブック』によれば「100 年以上の歴史を有し、現在も継続しているもの」を指す。

2021 年 1 月現在、国が指定した伝統的工芸品は 236 品目に達する。品目を業種別に記すと (数字は品目数)、織物 (38)、染織品 (13)、その他の繊維製品 (5)、陶磁器 (32)、漆器 (23)、木工品・竹工品 (32)、仏壇・仏具 (17)、和紙 (9)、文具 (10)、石工品 (4)、貴石細工 (2)、人形・こけし (10)、その他の工芸品 (22)、工芸材料・工芸用具 (3) である [1)]。

指定品目が最多なのは東京（村山大島紬、江戸切子など）の 19 品目、次いで 17 品目の京都（西陣織、京友禅など）と新潟（塩沢紬、十日町絣など）が同列 2 位、そして 14 品目の愛知と続く。指定された業種についてみると、東海地方は美濃焼（岐阜）、常滑焼、赤津焼、瀬戸染付焼、三州鬼瓦工芸品 (愛知)、四日市萬古焼、伊賀焼（三重）と、他の地域と比較して、やきものの指定されている割合が高い。**表 1** は各地域における指定品目数と指定陶磁器の数から、その割合を算出したものである。指定品目で陶磁器が占める割合が多いのは九州 (42.9%)、東海 (25.9%)、四国 (22.2%) であることがわかる。

前述のように、伝統的工芸品の定義に「100

表 1　伝統的工芸品　地域別指定品目と陶磁器の品目一覧

地域	指定品目数	やきものの数	やきものの割合（%）
北海道	2	0	0
東北	23	2	8.7
関東・甲信越	59	2	3.4
東海	27	7	25.9
北陸	23	2	8.7
近畿	40	4	10
中国	16	3	18.8
四国	9	2	22.2
九州	21	9	42.9
沖縄	16	1	6.3

（経産省のデータより廣田作成。割合については小数点第二位を四捨五入した）

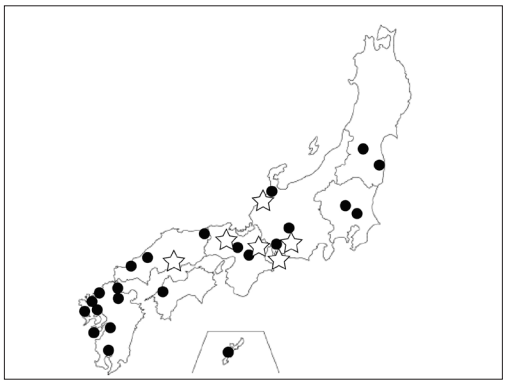

図１　日本全土の主要なやきもの産地
（［鶴哲・村井編 2020］を参考に廣田作成）

年以上継続してきた」、「日常生活の用に供されるもの」という条件が含まれているならば、品目の中でもとくに、人の生活にはかかせない、食と関わる器＝陶磁器が多く指定されるのは当然だともいえよう。粘土質の素地をこねて形成し、釉薬をかけずに低温で焼成した素焼きの器は、先史時代からつくられている。よい粘土を採掘できる地域が、九州、東海、四国に多くあり、やきものの伝統を継承してきたことが、伝統的工芸品の指定の数でも示されている。これを全国の主要なやきもの産

表２　東海周辺の窯業地で行った調査の覚え書き

地域	特徴
常滑	六古窯のひとつで「朱泥製品」が代表的。江戸時代後期に始まった急須のシェアは国内一。 明治時代に連房式登窯、土管、工芸陶器・輸出陶器の開発が盛んになった。 明治 20 年、陶工の伊奈初之丞が陶管製造を始め、大正 10 年に伊奈製陶所を創業、常滑の地で建築陶器産業を盛り立てた。INAX ライブミュージアム、観光客が散歩しながらカフェや、やきもの店を楽しめる「やきもの散歩道」があり、観光地としての印象はあるが、窯元や陶作家の工房は目につかない。しかし、観光エリアからは少し離れた場所にある「とこなめ陶の森」は資料館、陶芸研究所、研修工房を備えており、常滑焼の振興と伝承、やきもの文化の創造と発信を担う重要な施設であると見受けられる。伊那製陶の創業者の寄付により開設した陶芸研究所では２年間の研修制度があり、陶芸家を目指す若者の育成にも力を入れている。
赤津（瀬戸市）	赤津地区の窯元有志 21 組が設立した窯元まわし会が「赤津窯の里」の名称で、年に２度（5 月と 11 月の第２土日）の「窯の里めぐり」イベントを行う。瀬戸市観光振興計画による支援もある。散策を助けるわかりやすい地図もあり、イベント期間は工房のガレージなどに訳アリ品や半端モノが安価に販売される。若い世代が地域の産業を守ろうという意思を感じた。廃業した工場が散見され、荒廃した建物を外部からやってきた陶芸作家が借り受け、工房として使用している例が数件あった。
品野（瀬戸市）	赤津と同じ日程で「しなの工房巡り」を開催している。赤津と比較すると、若い継承者が少ないのか、活気が少ないように感じる。瀬戸焼の発信方法については、赤津が SNS を駆使しているのに比べ、公式ホームページに更新が見られず、定期的な運営ができているのかは疑問。2021 年 11 月の工房巡りに関しては、インスタグラムでの発信が見られた。赤津よりも広いエリアに、それほど多くない工房が建っており、互いの交流はあまりないとのことだった。この地域ではおもにテーブルウエアが生産されている。
四日市	土鍋、紫泥の急須の萬古焼が有名。江戸時代中期に三重県桑名市の豪商が自ら茶器を焼いたのがはじまりといわれる。いつまでも自分の作品が世に残るように「萬古不易」と印したのが由来。のちに食器、花器、家電パーツ、工業製品の型などもつくる産地となった。 近鉄四日市駅、川原町駅周辺に「ばんこの里会館」「萬古アーカイブデザインミュージアム」があり、萬古焼の歴史や、土鍋などの商品を見ることはできるが、生産されている場は街を歩いても確認することができなかった。
多治見	土岐市、瑞浪市、多治見市を合わせた東濃地域でもっとも人口が多いのが多治見市。陶に関する美術館や資料館、作陶施設の他、美濃焼卸商業団地、美濃焼卸センター、道の駅など、美濃焼を体験、購入するための施設が多い。市をあげてやきものを盛り上げている印象が非常に強い。市立図書館の一角に設置された陶芸関係書籍の収集量からも、やきものが市民の暮らしに深く関わっていることが感じられる。岐阜県現代陶芸美術館は国内外の現代陶に関する展覧会を常時開催しており、本町オリベストリートに位置するギャラリーヴォイスも現代陶を積極的に紹介、展示している。

※調査は 2021 年３月から 11 月までに、常滑で１日、赤津で２日、品野で２日、四日市で２日、多治見で６日行った。

地と併せたのが**図 1** である。●で示したのが伝統的工芸品として指定された陶磁器の産地、☆は六古窯[2)]を指している。

東海地方には六古窯のうち常滑焼と瀬戸焼が含まれており、伝統的工芸品に指定された窯業地を併せると、美濃焼、瀬戸焼（赤津焼、瀬戸染付焼）、常滑焼、四日市萬古焼が生産される「やきもの密集地域」であることがわかる。筆者は伝統を継承した陶磁器 (従来からつくられている生活に根づいた器物と、美術品としての陶芸作品) と現代陶が、同時に生産されている窯業地を確認するため、これらの窯業地の調査を行った。瀬戸焼の赤津、品野地域に間をあけて 2 度足を運んだのは、「窯の里めぐり」「工房巡り」といった人出の多いイベント時期と、行事のない状況の両方を確認するためである。各地の特徴を簡単にまとめると、**表 2** のようになる。

このように、東海地方の窯業地は地域によって、つくられるもの、制作の環境、販売を含めたつくり手の支援環境など、すべてが異なるものだった。伝統的な器物と現代美術に類する現代陶が並行して生産されているという点では、多治見市周辺が目立っていた。東海地方のやきもの産地でのフィールドワークで状況をみた後、筆者は調査地を多治見に絞った。

3　美濃焼のはじまりと今

岐阜県の多治見市、土岐市、瑞浪市でつくられる美濃焼の源流は、7 世紀の須恵器に遡る。鎌倉・室町時代には、隣接する瀬戸とともに中国の茶碗を模す「唐物写し」が盛んになり、15 世紀以降は半地上式大窯をつかった生産が始まる。16 世紀には織田信長の経済政策で瀬戸から多くの陶工が美濃地方へ移ったことにより、美濃地方は生産の中心地として発展した。戦国時代終わりから江戸時代初期にかけて、この地で焼かれたやきものは「美濃桃山陶」と呼ばれ、茶人に愛された。桃山陶の代表的な種類としては、黄瀬戸、瀬戸黒、志野、織部焼が挙げられる［柏木編 2019: 24, 52］。

伝統的な陶作品は本稿のテーマから逸れるため、ここではそれぞれの特徴を簡単に記すに留めておく。黄瀬戸（**写真 1**）は灰釉をベースとして黄瀬戸釉をかけて焼いた淡黄色い肌のやきものだ。瀬戸黒は漆黒の鉄釉を施したもので、ほとんどは茶碗としてつくられる。高台と高台脇に釉薬を掛け残して土肌をわざと見せるのが特徴である。黄瀬戸、瀬戸黒は、瀬戸の窯元が美濃に移り住んで制作した際に、出身地名を付してやきものの名称にしたといわれる。

写真 1　黄瀬戸立鼓花入
桃山 16 世紀
大松美術館蔵
出典：［伊藤・唐澤 2003: 11］

写真 2　鼠志野茶碗　銘「山の端」
重要文化財　桃山 16 ～ 17 世紀
根津美術館蔵
出典：［伊藤・唐澤 2003: 23］

写真 3　鳴海織部松皮菱手鉢
重要文化財　桃山 17 世紀
北村美術館蔵
出典：［伊藤・唐澤 2003: 36］

志野（**写真 2**）は、白いもぐさ土という粘土に長石釉 (志野釉) を掛けたもので、艶消しの乳白色のふくらみのある肌が特徴である [3]。茶碗、水指、向付、香合などの茶陶、ぐい呑、徳利、皿、鉢など幅広い器が生産されている。美濃で生まれたやきものの中で、独特な意匠をもつといわれるのが、器の形、文様の種類が豊富な織部焼（**写真 3**）である。織部焼はさらに、釉薬、装飾技法によって細かく分類されている。釉薬はおもに黒釉と緑釉（銅緑釉）に分けられ、黒釉薬のみを掛けたものは織部黒、鉄絵や白抜きで文様をつけたものは黒織部と呼ばれる。一方、緑釉を器全体に掛けたものは総織部、緑釉と長石釉を掛け分けて鉄絵で文様を入れたものは青織部と呼ばれる [4]。

美濃はまた、全国でみても突出して陶芸家の人間国宝 (重要無形文化財保持者) が多いことが特記できる。桃山陶の復興に尽力した多治見生まれの荒川豊蔵（1894 ～ 1985）[5]、志野の鈴木藏（1934 ～）[6]、三彩の加藤卓男（1917 ～ 2005）[7]、瀬戸黒の加藤孝造（1935 ～）[8] らが、それぞれ独自の表現で美濃焼をより豊かなものにした。

こうした伝統的工芸品としての美濃焼をつくる陶芸家がいる一方、美濃地方は現在、大きな工場で多くの食器類（磁器）が生産されており、国内シェアの半数以上を誇る。それだけではない。伝統に根ざしながらも独自のスタイルで作品をつくる陶芸作家や、伝統にも多治見という土地にも縛られず、自由に陶作品をつくる例も少なくない。多治見には粘土を介して、伝統的工芸品としてのやきもの、現代陶、磁器の食器といったさまざまな商品や作品のつくり手が暮らし、それぞれのやきものが、それぞれの市場へと流通している。

ところで、本稿で筆者が「現代陶」と記す場合は、たとえば中島晴美 [9]（**写真 4**）や、加藤智也 [10]（**写真 5**）の作品群を指している。前出の伝統的な器物（写真 1 から 3）と比較すれば、つくり出される形態がまったく異なるものであることは誰の目にも明らかだろう。では、この地域で脈々とつくられてきた伝統的なやきものとはまったく異なるこうした現代陶は、どのようにして多治見周辺で広がっていったのだろうか。調査から見えてきたのは、2 つの要因である。

3　現代陶芸家を支える要因

3.1　現代陶芸家に開かれた公募展：国際陶磁器フェスティバル美濃（international ceramics festival MINO）

美濃地方で制作する現代陶芸家が活動しやすくなった要因のひとつは、若手が参加することを可能にした国際展の始まりである。

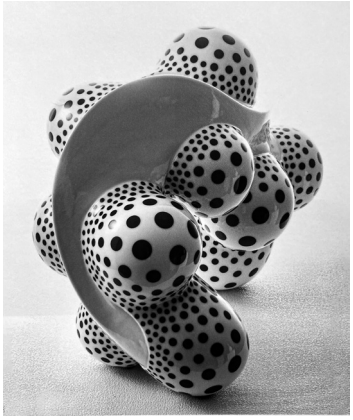

写真 4　中島晴美 《内なるかたち 2020》
出典：［外舘（監）2020: 42］

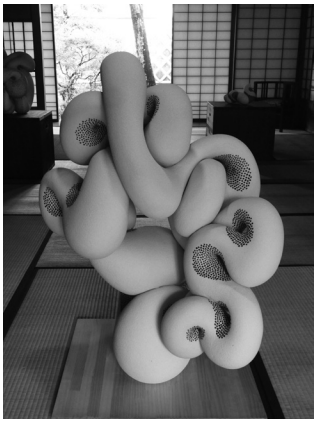

写真 5　加藤智也 《Intron 2022-1》
（2022 年 9 月 18 日廣田撮影）

1960 ～ 70 年代は、中日国際陶芸展[11]、日本陶芸展[12]、朝日陶芸展[13]という公募展が、若手にとって数少ない陶芸の登竜門だった。しかし 1986 年に始まった「国際陶磁器フェスティバル美濃：土と炎の国際交流」や、1990 年代に開催された「土・メッセージ IN 美濃」展といった新しい公募展が、団体に所属しない多くの若手作家の受け皿となっていった［正村 2015: 64］。

多治見市文化工房ギャラリーヴォイスのエグゼクティブ・ディレクターで、現代陶芸家でもある川上智子は、「1980 年代初頭までは、（岐阜県美濃地方を基盤として活動する）美濃陶芸家協会のような団体に所属していないと、光が当たらなかった。多治見の陶芸は、伝統が強いイメージだった」[14]と語っている。1963 年に設立されて以来、美濃陶芸協会の歴代会長は、加藤卓男、加藤孝造、加藤幸兵衛ら、前述した人間国宝たちである。現在も展覧会や講演会、陶芸イベントなどを実施しているが、会員のほとんどはいわゆる鑑賞陶器のつくり手である。こうした伝統を踏襲した作品をつくる作家たちの協会に、現代陶を制作する作家たちは所属していなかったのである。

川上は続ける。

> 『国際陶磁器フェスティバル美濃』が始まり、協会に所属していない作家の作品も取り上げられるようになりました。多治見の若手作家は、海外からやってくる作品を見ることによって大きな刺激を受けました。海外の審査員による評価を知り、陶作品の新たな価値もわかりました。国際展で器物ではない現代陶を目にすることができ、あの辺りから大きな変化があったと感じています[15]。

多くの人間国宝を生んだ美濃焼の街、多治見では、伝統的なやきものが主流であり、現代陶に対する評価の受け皿はなかなか生まれなかった。そうした状況の中で始まった「国際陶磁器フェスティバル美濃」は、多治見周辺の現代陶芸家たちの発表の場として、また、見る機会の少なかった海外の陶作品を鑑賞する場として、陶芸家たちに大きな影響を与えたのである。3 年に 1 度開催される世界最大級の陶磁器の祭典は 1986 年に第 1 回を開催[16]してから 2021 年で第 12 回目を迎えた[17]（**写真 6、7**）。

この国際展の主な事業は「国際陶磁器コンペティション」である。第 12 回の応募作品は陶芸部門 1,873（うち海外から 1,299）点、陶磁器デザイン部門に 562（うち海外から 374）点、総数 2,435（うち海外から 1,673）点から陶芸部門の入賞・入選は 124（57）点、

写真 6　国際陶磁器フェスティバル美濃 '21
セラミックパーク MINO 入口
（2021 年 10 月 12 日廣田撮影）

写真 7　国際陶磁器フェスティバル美濃 '21
展覧会場
（2021 年 10 月 12 日廣田撮影）

陶磁器デザイン部門が 54（22）点、全体では 178（79）点が選ばれた。グランプリには中国の作家ヤー・ホイヤン、金賞には株式会社セラミック・ジャパンが選ばれた。

「国際陶磁器フェスティバル美濃」の開始から 30 年以上が経ち、今では若手陶芸家が挑戦できる公募展もいくつか生まれた。たとえば菊池寛実記念智美術館（東京都）[18] が 21 世紀の陶芸界の新たな展開を目的に 2004 年から隔年で公募する「菊池ビエンナーレ」。第 9 回となる 2021 年は 279 点の応募作品から 54 点が入選し、同美術館で 12 月 11 日から 2022 年 3 月 21 日まで展示される。笠間陶芸美術館（茨城県）が今年 2021 年に開館 20 周年を記念して開催を始めた「笠間陶芸大賞展」は、伝統工芸、オブジェ、生活の器・食器などのジャンルを問わず、あらゆる陶磁器を公募している。選出された作品は茨城県陶芸美術館で展示される [19]。1989 年に開館した伊丹市立工芸センター（兵庫県）が、工芸芸術の発展を目的に開館当初から行っている公募展「伊丹国際クラフト展」は、毎年国内外から集まったクラフト作品から優秀作品を選んで展示している [20]。

このように、国内でも自由な表現方法で土と向かい合った現代陶に注目が集まり、作品を多くの人々に見てもらえる機会が明らかに増加した。若い作家たちは国内だけでなく、国際展にも積極的に作品を送って腕試しをしている。後述する多治見市陶磁器意匠研究所のホームページには、研究生が受賞した公募展として以下のようなものを掲載している。

- ファエンツァ国際陶芸展（イタリア）
- ヴァロリス国際陶芸ビエンナーレ（フランス）
- 京畿道世界陶磁ビエンナーレ（韓国）
- 台湾セラミックスビエンナーレ
- 清州国際工芸ビエンナーレ（韓国）
- 国際金壺陶芸デザイン競技展（台湾）
- ロエベクラフトプライズ（スペイン）
- ラトビア国際陶磁ビエンナーレ（ラトビア）

若手の現代陶芸家にとって、これらの公募展に挑戦するということは、国際舞台における自身の評価を知るだけでなく、賞を獲得すれば自身の名前と作品を広く知らしめることのできる大きな登竜門なのである。

3.2　現代陶芸家の育成場：多治見市陶磁器意匠研究所

美濃地方で現代陶芸家が活動しやすい要因のもうひとつは、陶関係の教育機関だ。以下では多治見市陶磁器意匠研究所、岐阜県立多治見工業高校の専攻科について記す。

筆者が多治見周辺で聞き取りを行った中で、頻繁に耳にしたのがイショケンだった。「ishoken（イショケン：以降本稿では関係者の呼び方に倣いイショケンと記す）」の呼称で知られる多治見市陶磁器意匠研究所（**写真 8**）は、1951 年に多治見陶磁器上絵付加工工業協同組合によって、美濃焼上絵付研究所として設立されたものが母体である。2 年後の 53 年、上絵付施術者を養成するための特別研修生制度が発足して夜間研修が始まり、59 年に現在の名称である多治見市陶磁器意匠研究所として共同組合から多治見市へ移管された。60 年に研究所第 1 期生が卒業して以来、これまでにイショケンの卒業生はすでに 900 名を超え、美濃焼業界従事者、陶芸作家、陶磁器デザイナーとなって活動している [21]。

イショケンの特徴は、大学や短大、専修学校とは異なる、公設（多治見市立）の試験研究機関であるということだ。「地元の陶磁器業界への貢献を前提とした人材育成」を目的として、3 つのコースを有する。18 ～ 30 歳を対象とした 2 年課程にはデザインコースと技術コースがあり、1 年目には 2 コース共通の実習と講義のカリキュラムを受講し、

写真８　多治見市陶磁器意匠研究所外観
（2021 年 10 月 12 日廣田撮影）

写真９　多治見市陶磁器意匠研究所工房
（2021 年 10 月 12 日廣田撮影）

やきものに関する基礎的な知識と技術を学ぶ（**写真 9**）。その後、適性や希望に合わせてデザインコース、または技術コースを選択する[22]。2 年目には、応用制作課題と卒業制作のために、各々がテーマを設定し、作品制作に入る。

これら 2 コースの上位にあたるセラミックスラボは定員 3 名程度。入所の資格は年齢満 20 歳以上満 40 歳以下で、デザインコースを修了した者又は技術コースを修了した者、もしくは同等程度の知識及び技能があると認められる者とされている[23]。中には芸術大学を卒業し、陶関係の会社に勤めた後、退職して入所している者もいる。

研究所の指導体制は、所長・副所長を筆頭に、デザイン支援グループに 4 名、人材育成・技術支援グループに 7 名の講師。関係者のほとんどはイショケン出身者、あるいは他の機関で陶磁器制作を学んだ多治見周辺の出身者である。

イショケンの設立時から所長として研究生の指導にあたった陶芸家の中島晴美は、当時のことを次のように回想している。「私が若かった頃、共に励んだ仲間たちは、皆、美濃の窯焼きの後継ぎである。彼らは家業の自社製品をデザイン開発するところから制作に目覚め、個人作家と家業を共存させた」［中島 2008: 40］。これは彼がイショケンで人材育成を担当していた 70 ～ 80 年代のことだと思われる。イショケンは地場産業の後継者の育成を目的に設立されており、初期はまさしく、多治見周辺の窯元の後継ぎの“修行の場”となっていたようだ。

ところが、昨今はそうではなくなってきている。現在、イショケンで人材育成を担当する現代陶芸家の駒井正人は、「かつては窯元の後継ぎが、まずイショケンで学び、それから家業を継ぐのが一般的でしたが、昨今は美術大学などで陶芸やデザインを学んでからイショケンを目指すケースが増加しており、地元窯業地の後継ぎにとって、ハードルの高い場のような印象を与えています」と説明している[24]。筆者が調査に入った日に紹介された研究生には、愛知県立芸術大学美術学部陶芸科の出身者の他、関西方面の芸術大学で学び、デザイナーとして働いてから入所したという者もいた。駒井の言う昨今の若い世代は、「初めから素材を限定することに迷いや矛盾はなく、陶での制作に関心が高い」［中島 2008: 40］という特徴がある。

筆者がイショケンで作業中の研究生に話を聞いても、陶磁器を学ぶのに多治見を選択した理由は、多治見の地場産業への興味ではなく、単に陶芸が好きだった、多治見ならば陶芸を学びながら陶関係のアルバイト先も多くあったからと答えている。その他の理由としては、同世代の陶芸関係者（イショケンの先輩）が近くに多く暮らしているため、展覧会やスタジオの情報を早く多く入手でき、運が良ければ展覧会への出品を誘ってもらう機会

があることも挙げている。イショケンでは新たな試みとして、市内の空き家を現役、OB、OG にスタジオとして紹介するといった支援も行っている。こうしたことも、若手が入所を決める理由のひとつとなっているのかもしれない。

イショケンのような陶に特化した教育研究機関は国内にいくつか存在する。**表 3** は駒井が挙げたイショケンに類似する教育研究機関である。愛知県には 3 施設、本稿で記述したように岐阜県には 2 施設があり、美濃焼、瀬戸焼の窯業地である東海地方がいかに後継者育成に力を入れているのかがわかる。

3.3 現代陶芸家の育成場 2：岐阜県立多治見工業高等学校専攻科（陶磁科学芸術科）

美濃地方にはもうひとつ、岐阜県立多治見工業高校の専攻科という教育機関がある。1962 年に陶芸とセラミック技術の 2 コースが併設され、95 年から 2 年制となった専攻科は、美濃焼窯業地の“後継者養成施設”と

表 3　イショケンに類似する陶関係の教育研究機関

県	名称	内容
茨城	県立笠間陶芸大学校（笠間市）	1950 年、県内窯業の振興対策として県立窯業指導所が設置された。 1985 年、工業技術センター窯業指導所となる。 2016 年、県立笠間陶芸大学校として開校。 「現代陶芸とリードする陶芸家を輩出する産地」と「手作りを基本に日用陶磁器を生産する産地」の両面を併せもつ陶芸産地を担う人材育成を行う。陶芸学科の修業年数は 2 年で定員 12 名、研究科は 1 年で定員 3 名 [25]。
愛知	とこなめ陶の森陶芸研究所（常滑市）	1961 年、陶芸の振興を目的とした研究・研修施設として開設。 一般に公開されている陶芸展示室と研修施設をもつ。常滑の街とともにつくり手を育てることを目的に、1 学年定員 5 名の少数制で指導を行う。研修期間 2 年で、陶芸作家を目指す若者のための研修制度がある [26]。
	新世紀工芸館（瀬戸市）	陶芸とガラス工芸の 2 年の研修コース。美術・芸術大学などでガラス工芸専攻を卒業・修了、または同等の知識・技能・経験を有するものを若干名募集している。カリキュラムはなく、自由な創作活動を行うことが可能 [27]。
	瀬戸染付工芸館（瀬戸市）	2000 年、瀬戸の伝統的技法、瀬戸染付の人材育成、技術伝承のため開館。染付の技術保存、継承を目的に研修生の受け入れを行う。定員は若干名で、染付の知識・技術・経験を有し、生業とする意欲のある者を 2 年間（最長 4 年まで延長可）受け入れる。一般向けの絵付教室、研修生の制作公開など、普及・啓発も行う [28]。
石川	金沢卯辰山工芸工房（金沢市）	1989 年金沢市制 100 周年記念事業として設立。金沢の伝統工芸の継承発展と文化振興を図る。「育てる・見せる・参加する」をテーマに時代の変化に対応できる工芸家の育成、工芸資料の展示を目指す。陶芸、漆芸、染、金工、ガラスの 5 工房で各工房若干名の技術研修者を募集、研修を行う。2 年もしくは 3 年（3 年次を希望する場合は 2 年次に審査）アーティスト・イン・レジデンスのプログラムで海外のアーティストを招聘 [29]。
岡山	備前陶芸センター（備前市）	岡山県の公的施設を 2011 年協動組合岡山県備前焼陶友会 (備前焼窯元、作家を中心とした団体) が引き継いで現在に至る。1 ヶ月と 1 年の研修コースがある [30]。
佐賀	県立有田窯業大学校（西松浦郡有田町）	1985 年、窯業界の後継者・技術者育成を目的に窯業専門の専修学校として開校。 2009 年、専門課程陶磁器科 4 年制を新設。 2016 年、佐賀大学と統合し、芸術地域デザイン学部芸術表現コースの有田セラミック分野となった。伝統工芸技術者養成教育の伝統を融合させた「やきもの」の専門課程（定員は各学年約 20 名）[31]。

（各教育機関のホームページを参考に廣田作成）

して人材育成に力を入れている。専攻科のカリキュラムは**表 4** のとおりである。

陶芸コースでは、ろくろ成形中心の造形実習、釉薬調合実習などがあり、徹底したやきものの基礎・基本を学ぶ。セラミック技術コースでは、セラミック製造技術・理論などの手法を学ぶ。2 年次になると修了制作のため、生徒各自が課題を設定して作品制作を行う。イショケン同様に、修了生の進路は陶芸家への弟子入り、地元陶磁器会社や釉薬製造会社への就職、陶芸教室の指導者などがあるという。

専攻科の教員の多くは金沢美術工芸大学出身者で、それに加えて OB、OG が数人いる。教員の作風はどちらかというと鑑賞陶芸、あるいは器物といわれるものだ。イショケン講師の駒井は、「イショケンは意匠研究所、つまり意匠（デザイン）を研究するという意味合いで設立しており、デザインから現代陶のような流れへと、自然に受け入れられているのではないかと思います」[32] と 2 つの教育機関の違いを説明している。

2021 年 11 月 6 日～ 8 日、多治見市のとうしん東濃陶芸美術館で「陶芸教育機関の交流展：CROSS-INTERACTION」展が開催された。これは去る 10 月にセラミックパーク MINO で開催された「国際陶磁器フェスティバル美濃 ‘21」の関連事業として予定されていたが、新型コロナウイルスの影響により、規模を縮小、延期して開催されたものである。展覧会では多治見工業高校専攻科、愛知県立芸術大学陶磁専攻、名古屋芸術大学アートクリエイターコース、瀬戸工科高校専攻科 [33]、とこなめ陶の森陶芸研究所が、高校や大学、研究所という機関の境界を跨いで実現した共同展である。ここにイショケンが加わっていないことからも、これら教育研究機関の“校風”に、鑑賞用陶芸（あるいは器物）と現代陶のかすかな境界があるようにも感じられる。

4　美濃焼を支える多様な施設

本稿の最後に、現代陶芸家を取り巻く現状として、つくったものを展示する場／鑑賞場についても見ておきたい。岐阜県には岐阜県現代陶芸美術館（セラミックパーク MINO に内設）のほか、多治見市美濃焼ミュージア

表 4　専攻科カリキュラム

1 年次		
日本美術史	2	工芸を中心とした日本の造形芸術
陶磁器総合	2	焼成方法や施釉方法並びに粘土の処理
陶磁器デザイン	4	鋳込み成形を用いた陶磁器デザイン
陶磁史	2	陶磁器の歴史
調合実習	4	釉薬の調合と粘土の性質を知る
計測	2	粘土の感想収縮率をはじめとする特性を知る
造形実習	6	ろくろ成形による器制作
成形実習	4	手びねり成形、たたら成形による作品制作
装飾技法	4	染付、上絵、鉄絵技法による装飾
コミュニケーション英語	1	自身の作品や陶芸についての考えを英語で表現する
2 年次		
デザイン史	1	近代のデザイン思想と工芸論
コミュニケーション英語	1	自身の作品や陶芸についての考えを英語で表現する
造形実習	6	ろくろ成形による作品制作
陶磁総合実習	6	自身で設定した課題に沿った作品制作
調合実習	4	ゲーゼル式を用いた釉薬の開発、調合
修了制作	12	修了制作展に向けた作品制作

（多治見市工業高等学校専攻科のホームページを参考に廣田作成。数字は単位数）

ム（**写真 10**）、瑞浪市陶磁資料館、土岐市美濃陶磁資料館、こども陶器博物館、市之倉さかづき美術館、多治見市モザイクタイルミュージアム（**写真 11**）など、陶磁器を鑑賞、または制作体験できる場所が他県と比較して圧倒的に多く点在している。また町の中心部からそれほど遠くない位置に、一般客の見学にも対応した窯元が数か所あり、産地直売や、やきもの体験を楽しむことも可能だ。

明治初期から昭和初期にかけて建設された商家や蔵を利用した長さ約 400m の道の両脇に、飲食店約 10 店舗、骨董を含めた陶磁器店約 20 店舗、数件の雑貨屋、和菓子屋などが軒を並べた多治見本町オリベストリートも、美濃焼を広く発信する重要な役割を果たしている。織部ストリートのスタート地点ともいえる場所には、多治見市 PR センターが入った陶都創造館（**写真 12**）があり、1 階には美濃焼を手ごろな価格で購入できる店舗、2 階には現代陶芸家の作品を紹介する多治見市文化工房ギャラリーヴォイス（**写真 13**）が入っている[34]。

上述の美術館や資料館の中で、主として現代陶を扱っているのは、岐阜県現代陶芸美術館と多治見市文化工房ギャラリーヴォイスである。ギャラリーヴォイスは規模としては小さいが、多治見周辺の現代陶芸家にとっては重要な活動拠点だといえる。そしてその理由は、ギャラリーのもつ陶芸家ネットワークにある。指定管理者制度によって、共栄電気炉製作所が多治見市から受託管理を行うギャラリーヴォイスは、イショケンの OG、川上智子がエグゼクティブ・ディレクターを務めている。川上本人も現代陶芸家であり、イショケン出身者とは強固で幅広い関係を保っている。

川上のイショケン時代から築いた人脈、現代陶に対する思い、現代陶に対する評価が、このギャラリー展示に反映されるのは当然だろう。過去の展覧会を見ると、イショケン出

写真 10　多治見市美濃焼ミュージアム
（2021 年 10 月 13 日廣田撮影）

写真 11　多治見市モザイクタイルミュージアム
（2021 年 10 月 13 日廣田撮影）

写真 12　本町織部ストリートの陶都創造館
（2021 年 7 月 31 日廣田撮影）

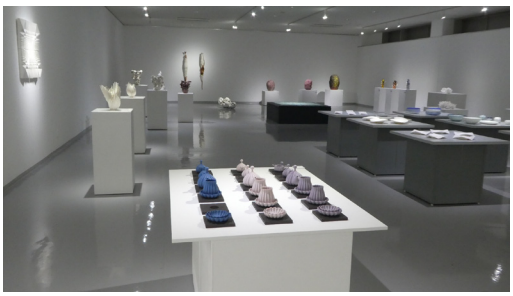

写真 13　多治見市文化工房ギャラリーヴォイス
（2021 年 3 月 27 日廣田撮影）

身者が世代を交えて作品発表していることがわかり、そしてまた、多くの現代陶芸家がイショケンから輩出されていることにも感嘆する。ギャラリーヴォイスでは、現代陶の展示だけではなく、一般市民に向けた陶芸教室、陶芸に関する講演会なども企画しており、陶都である多治見にあって広報的な役割も果たしている。

6　おわりに

本稿では、美濃焼の産地である多治見市を中心とした地域で、現代陶のつくり手に焦点を当て、伝統的工芸品とは異なるジャンルの現況を、公募展、教育研究機関、発表の場から調査したデータを、研究ノートとしてまとめた。数回の現地調査から見えてきたのは、イショケンという教育機関が、現代陶に関わるつくり手を育てることにもっとも影響力のある機関であり、そこで育った作家たちの受け皿の1つが多治見市文化工房ギャラリーヴォイスだということである。

展覧会の開会式や関連イベントで顔を合わせて情報収集をすることによって、若手作家は先輩やイショケン指導員との関係を深めていく。卒業しても多治見周辺に留まり制作を続けることにより、ネットワークは一層密になる。そして制作・発表の場や機会を共有していくのだ。つくり手、それを支える機関がバランスよく関わり合って、多治見周辺の現代陶は活気を得て次世代へと繋がっていく。

本調査は現在も継続しており、現代陶芸家周縁の現況についても参与観察と聞き取りを開始している。加藤智也氏は藤兵衛窯山只華陶苑が代々つくり続けてきたすり鉢を改良しながら7代目として窯を守る一方で、イタリアの「ファエンツァ国際陶芸展」でグランプリを受賞した経験のある現代陶芸家だ。早朝に起きて窯元の仕事が始まる8時までは陶芸家として作品に向かい、午後5時までは窯元の社長として受注した商品を生産している。本稿を出発点として、今後は一人の現代陶芸家が、伝統継承と創作活動をどのように両立させているのか、加藤氏の語りと周辺の調査から考察をしていきたい。

謝辞

本稿で記した調査は、平和中島財団令和3年度国際学術研究「アジア地域重点学術研究助成（研究課題：日本とインドネシアの窯業地における伝統継承の比較研究――職人制度・美的評価・流通経路からの多角的検討）」を受けて実施した。ここに感謝の意を表す。

＜注＞

1)　伝統的工芸品産業振興協会ホームページ、指定品目一覧・業種別 https://kyokai.kougeihin.jp/wp/wp-content/uploads/2021/03/af72b7dc24870769f0dfb03f5d46439d.pdf　2021年11月1日閲覧。

2)　陶磁器研究者で陶芸家の小山富士夫が区分して名づけた、日本古来の陶磁器窯の中で中世から現代まで生産を継続している代表的な6つの窯の総称である。北から越前焼、瀬戸焼、常滑焼、信楽焼、丹波立杭焼、備前焼が含まれる。

3)　志野は加える装飾や技法により、絵志野、無地志野、紅志野、赤志野、鼠志野、練込志野などに分けられる。

4)　美濃焼の中では、灰釉、天目、瀬戸黒、黄瀬戸、志野、織部、御深井、染付、赤絵、青磁、鉄釉、粉引、飴釉、美濃伊賀、美濃唐津の15種類が伝統的工芸品として指定を受けている［鶴哲・村井編 2020: 62］。

5)　岐阜県可児市には1984年に開館した荒川豊蔵資料館がある。豊蔵の得意とした志野作品の収蔵展示だけでなく、制作場の復元も見ることができる。

6)　多治見工業高等学校を卒業し、丸幸陶苑（幸兵衛窯）試験室で父の助手を務めた後、1966年に独立。

7)　多治見市市之倉にある幸兵衛窯、五代幸兵衛の長男。ペルシャのラスター彩陶の焼成に成功した。現在は卓男の長男、裕英が七代幸兵衛を継いでいる。
8)　多治見工業高等学校窯業科在学中に日展洋画部で入選し美術界から注目された。洋画を続けながら岐阜県陶磁器試験場で勤務するも 25 歳のとき陶芸一本で制作を始めた。
9)　1950 年岐阜県恵那市に生まれ、大阪芸術大学デザイン科陶芸専攻を卒業後、1976 年から多治見市陶磁器意匠研究所の初代所長を務めた。その後、愛知教育大学で教鞭をとり、2020 年より再び意匠研究所所長に復帰した。
10)　1972 年多治見市の窯元（藤兵衛窯山只華陶苑）に生まれ、1997 年に意匠研究所を修了後 2009 年に第 56 回ファエンツァ国際陶芸展でグランプリを受賞した。
11)　1970 年代に中日新聞主催で始まった陶芸展。80 年代後半で終わった。
12)　1971 年、毎日新聞創刊 100 年を記念して創設されて以来、ビエンナーレ方式で 2 年ごとに 25 回まで開催され、2019 年に事業が終了した。招待部門と公募部門からなり、公募部門は (1) 伝統部門、(2) 自由造形部門、(3) 生活の器部門で構成され、あらゆる陶磁器作品を対象にした。1971 年の第 1 回は (1) 一般部門、(2) 前衛部門、(3) 民藝部門と、推薦・招待部門で構成され 474 点が展示された。審査員には川端康成、白洲正子などの文化人も名を連ねた。（日本陶芸展公式ホームページより）
13)　1963 年、陶芸家の登竜門として朝日新聞社が主催して始まった陶芸公募展。2008 年の第 46 回展まで毎年開催されてきた。第 46 回は名古屋（スカイル丸栄催事場）、滋賀（滋賀県立陶芸の森・信楽産業展示館）、愛知（高浜市やきものの里かわら美術館）を巡回した。
14)　2021 年 7 月 31 日、ギャラリーヴォイスで行った川上智子氏への聞き取りによる。
15)　注 12 に同じ。
16)　第 1 回は 1986 年 11 月 2 ～ 9 日の 8 日間、多治見市総合体育館で開催された。
17)「国際陶磁器フェスティバル美濃」は地場産業の振興をはかり、美濃焼製品を世界へ PR することを目的に始まった。1983 年に日本陶磁器工業協同組合連合会、日本陶磁器卸商業協同組合連合会が協力し、美濃で国際デザインコンペを開催するという素案をつくると、85 年に岐阜県、多治見市、瑞浪市、土岐市、笠原町、商工会議所、陶磁器業界、青年会議所で構成された「国際陶磁器デザインコンペ開催準備委員会」が発足し、86 年には第 1 回が開幕した。
18)　菊池寛実記念智美術館ホームページ https://www.musee-tomo.or.jp/　2021 年 11 月 1 日閲覧。
19)　笠間陶芸大賞展ホームページ https://www.tougei.museum.ibk.ed.jp/statics/exhibition/kca2021/　2021 年 10 月 5 日閲覧。
20)　伊丹市立工芸センターホームページ https://mac-itami.com/international/ 2021 年 11 月 1 日閲覧。
21)　2016 年 5 月には、作品展示のできる ishoken gallery（イショケン・ギャラリー）を本館 1 階に新設し、年に 1 ～ 3 回の展覧会を開催し、一般にも公開している。
22)　入所の資格については以下のように記されている。定員は 20 名。
(1) 年齢満 18 歳以上満 30 歳以下の者。(2) 高等学校卒業若しくは卒業見込みの者又は高等学校を卒業した者と同等程度の知識及び技能があると認められる者。(3) 養成科目に関する業務に従事し、又は従事しようとする者。(4) 品行方正であって、研究に熱意を有する者。
23)　セラミックスラボでは通常選考の他、外国籍を有する者にも外国人特別選考が設けられているが、新型コロナウイルス感染症が

蔓延してからは受け入れができない状態だという。

24)　2021年10月12日、イショケンで行った駒井正人氏への聞き取りによる。

25)　茨城県立笠間陶芸大学校ホームページ http://www.itic.pref.ibaraki.jp/tougeidai/ 2021年10月12日閲覧。

26)　とこなめ陶の森陶芸研究所ホームページ http://www.city.tokoname.aichi.jp/shisetsu/tounomori/1001160.html　2021年10月12日閲覧。

27)　新世紀工芸館ホームページ http://www.seto-cul.jp/new-century/ 2021年10月12日閲覧。

28)　瀬戸染付工芸館（公益財団法人瀬戸市文化振興財団）ホームページ http://www.seto-cul.jp/sometsuke/index.html　2021年10月12日閲覧。

29)　金沢卯辰山工芸工房ホームページ https://www.utatsu-kogei.gr.jp/　2021年10月12日閲覧。

30)　備前陶芸センターホームページ http://bizen-tougei.okayama.co/　2021年10月12日閲覧。

31)　佐賀大学芸術地域デザイン学部ホームページ https://www.art.saga-u.ac.jp/course/artistic-expression/arita-ceramic.html　2021年10月12日閲覧。

32)　2021年10月12日、イショケンで行った駒井正人氏への聞き取りによる。

33)　岐阜に隣接する愛知県瀬戸市の瀬戸工科高等学校専攻科工芸デザイン科は、高等学校卒業後の2年間、座学と実習で陶芸を幅広く学ぶ教育機関。セラミック陶芸コースとデザインコースの定員はそれぞれ10名。

34)　この都市計画は2002年、多治見市都市計画審議会で承認された。伝統的産業である陶磁器産業の低迷打開のため、「にぎわいのまちづくり」を進めた。歴史的な町屋や蔵を活用し、食・宿・祭のある街づくり、多治見随一の社交ストリートを目指した。

＜参照文献＞

伊藤嘉章・唐澤昌宏　2003『日本のやきもの　美濃』淡交社。

大西秀之　1998「土器製作者の誕生――カンカナイ社会における技術の伝習と実践」『民族學研究』62(4): 470-493。

陶工房編集部編　2019『季刊陶工房』No.94 誠文堂新光社。

金子賢治　2020『陶芸家150人――2020年現代日本の精鋭たち』阿部出版。

金子守恵　2011『土器つくりの民族誌――エチオピア女性職人の地縁技術』昭和堂。

坂下俊哉　2016「現代カンボジアにおける土器づくり――コンポンチュナン州アンドゥオン・ルッサイ村の調査報告」『南山考人』41: 41-79。

外舘和子（監修）　2020『炎芸術』No.143 阿部出版。

谷口重徳　2002「サークルアーティストの世界――ある新人陶芸作家の事例から」『ソシオロジ』46(2): 89-104。

谷口重徳　2003「現代陶芸作家の経歴類型――社会的承認過程の理解のために」『現代社会学』4: 39-53。

谷口重徳　2004「現代陶芸作家の参入経路の多様化と活動場所の偏在化」『市大社会学』5: 69-83。

鶴哲聡・村井慶治編　2020『やきものハンドブック』日本陶磁器卸商業協同組合連合会。

伝統的工芸品産業振興協会編　2014『Traditional crafts of Japan = 経済産業大臣指定伝統的工芸品』伝統的工芸品産業振興協会。

中島晴美　2008「教えるという立場から」『季刊つくる陶磁郎』43: 40。

羽田新　1996「窯元、陶芸作家の経営・労働意識――仕事のやりがいと伝統への対応を中心として」『明治学院論叢』575: 319-328。

羽田新　2003『焼き物の変化と窯元・作家――伝統工芸の現代化』御茶ノ水書房。

濱田琢司　2006『民芸運動と地域文化――民陶産地の文化地理学』思文閣出版。

正村実怜　2015「美濃の陶芸、現況と活況」『炎芸術』121: 59-64。

モーラン、ブライアン　1980「土と水と火――陶工の集落構成に対する生産・需要・供給関係の影響について：日田市小鹿田皿山の社会人類学的調査から」『九州人類学会報』7: 24-32。

モーラン、ブライアン　1989「美術・陶芸・社会人類学の価値観について――日本の陶芸を人類学的に観察する」『民族学研究』54: 310-320。

ルナゴメス・レイイェスロベルト　2021「パレオ・インディオとアメリカ大陸最古の土器文化」南智博訳『年報人類学研究』12: 272-278。

インターネット資料

アートスケープ 三沢厚彦「ANIMALS ＋」
http://artscape.jp/artscape/exhibition/curator/kt_0708.html
伊丹市立工芸センター
https://mac-itami.com/international/　2021 年 11 月 1 日閲覧。
茨城県立笠間陶芸大学校
http://www.itic.pref.ibaraki.jp/tougeidai/　2021 年 10 月 12 日閲覧。
笠間陶芸大賞展
https://www.tougei.museum.ibk.ed.jp/statics/exhibition/kca2021/　2021 年 10 月 5 日閲覧。
金沢卯辰山工芸工房
https://www.utatsu-kogei.gr.jp/　2021 年 10 月 12 日閲覧。
菊池寛実記念智美術館
https://www.musee-tomo.or.jp/　2021 年 11 月 1 日閲覧。
経済産業省、伝統的工芸品
https://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/mono/nichiyo-densan/index.html　2022 年 5 月 4 日閲覧。
佐賀大学芸術地域デザイン学部
https://www.art.saga-u.ac.jp/course/artistic-expression/arita-ceramic.html　2021 年 10 月 12 日閲覧。
新世紀工芸館
http://www.seto-cul.jp/new-century/　2021 年 10 月 12 日閲覧。
瀬戸染付工芸館
http://www.seto-cul.jp/sometsuke/index.html 2021 年 10 月 12 日閲覧。
伝統的工芸品産業振興協会
https://kyokai.kougeihin.jp/wp/wpcontent/uploads/2021/03/af72b7dc24870769f0dfb03f5d46439d.pdf 2021 年 11 月 1 日閲覧。
とこなめ陶の森陶芸研究所
http://www.city.tokoname.aichi.jp/shisetsu/tounomori/1001160.html　2021 年 10 月 12 日閲覧。
日本陶芸展
https://www.mainichi.co.jp/tougei/　2021 年 10 月 5 日閲覧。
備前陶芸センター
http://bizen-tougei.okayama.co/　2021 年 10 月 12 日閲覧。

（2022 年 1 月 23 日受理）

Current Condition of Contemporary Ceramics in 'Mino-yaki' Industry

Midori Hirota

Keywords
Traditional Crafts, Mino-yaki, Contemporary Ceramics, Ceramic Artists, Potters

This paper is a summary of initial survey data from joint research since March 2021, about ceramic artists who create contemporary ceramic works in traditional ceramic industry. Among the "Rokkoyo (Six Ancient Kilns)" which are typical areas of ancient ceramic kilns that have been produced from the middle ages to the present, "Tokoname-yaki" and "Seto-yaki" are made in Aichi prefecture. Beside it, "Mino-yaki", "Akatsu-yaki", "Seto dyed ware", "Tokoname-yaki", and "Yokkaichi Banko-yaki" which are specified as traditional crafts, are also active ceramics, so Tokai region can be said "Pottary Dense Area".

In these ceramics industry that have developed while inheriting the tradition, contemporary ceramics that are different from the traditional "Utsuwa-mono (vessels)" are also created. Based on a survey around Tajimi city, the center of "Mino-yaki", this paper describes the current condition of contemporary ceramics from the perspective of a place for evaluation of contemporary ceramic works (International Ceramic Festival Mino), an educational institution by local government (Tajimi city pottery design and technical center), a place for presentation and appreciation (Museum of Modern Ceramic Art Gifu, Mino Ceramic Art Museum Tajimi, and Gallery VOICE).